欅
願う生徒像　「心ゆたかに」
学校教育目標　「ともに学び　たくましく生きる」
協働　自律　貢献
2月
第5ｽﾃｰｼﾞ（1/5～3/17）「自分の成長を振り返り、人に感謝するステージ」
島田市立六合中学校　2月号（親子道徳号）

第２回　親子道徳

今回は、親子道徳の二回目として、生徒全員に配布されている「私たちの道徳」から以下のコラムを掲載させていただきました。このコラムを家庭内で読んでいただき、感想や思ったことなどをお話し合いください。裏面に記入欄を設けましたので、感想や話し合った内容、様子などについてお寄せいただければありがたく思います。よろしくお願いいたします。

僕が看取った患者さんに、スキルス胃がんに罹った女性の方がいました。余命三か月と診断され、彼女は諏訪中央病院の緩和ケア病棟にやってきました。

ある日、病室のベランダでお茶を飲みながら話していると、彼女がこう言ったんです。「先生、助からないのはもう分かっています。だけど、少しだけ長生きをさせてください」彼女はその時、四十二歳ですからね。そりゃそうだろうなと思いながらも返事に困って、黙ってお茶を飲んでいた。すると彼女が、「子供がいる。子供の卒業式まで生きたい。卒業式を母親として見てあげたい」と言うんです。九月のことでした。彼女はあと三か月、十二月くらいまでしか生きられない。でも私は春まで生きて子供の卒業式を見てあげたい、と。子供のためにという思いが何かを変えたんだと思います。

奇跡は起きました。春まで生きて、卒業式に出席できた。こうしたことは科学的にも立証されていて、例えば希望を持って生きている人のほうが、がんと闘ってくれるナチュラルキラー細胞が活性化するという研究も発表されています。おそらく彼女の場合も、希望が体の中にある見えない三つのシステム、内分泌、自律神経、免疫を活性化させたのではないかと思います。

さらに不思議なことが起きました。彼女には二人のお子さんがいます。上の子が高校三年で、下の子が高校二年。せめて上の子の卒業式までは生かしてあげたいと僕たちは思っていました。でも彼女は、余命三か月と言われてから、一年八か月も生きて、二人のお子さんの卒業式を見てあげることができたんです。そして、一か月ほどして亡くなりました。

＊

彼女が亡くなった後、娘さんが僕

●東京都出身。医師。諏訪中央病院名誉院長。経営危機の状況にあった諏訪中央病院の医師として勤務、昭和63（1988）年に院長になる。●著書「がんばらない」では、延命だけを目的にした治療を批判的にとらえ、患者とその家族に接する豊富な経験や豊かな生と死についての考えがつづられている。●ベラルーシ共和国（当時ソ連）のチェルノブイリ原子力発電所事故の被爆患者の治療などの支援活動に取り組んでいる。

鎌田　實（かまたみのる）1948～

のところへやってきて、びっくりするような話をしてくれたんです。僕たち医師は、子供のために生きたいと言っている彼女の気持ちを大事にしようと思い、彼女の体調が少しよくなると外出許可を出していました。

「母は家に帰ってくるたびに、私たちにお弁当を作ってくれました」と娘さんは言いました。彼女が最後の最後に家へ帰った時、もうその時は立つこともできない状態です。病院の皆が引き留めたんだけど、どうしても行きたいと。そこで僕は、「じゃあ家に布団を敷いて、家の空気だけ吸ったら戻っていらっしゃい」と言って送り出しました。ところがその日、彼女は家で台所に立ちました。立てるはずのない者が最後の力を振り絞ってお弁当を作るんですよ。

その時のことを娘さんはこのように話してくれました。「お母さんが最後に作ってくれたお弁当はおむすびでした。そのおむすびを持って、学校に行きました。久しぶりのお弁当が嬉しくて、嬉しくて。昼の時間になって、お弁当を広げて食べようと思ったら、切なくて、切なくて、なかなか手に取ることができませんでした」

お母さんの人生は四十年ちょっと、とても短い命でした。でも、命は長さじゃないんですね。お母さんはお母さんなりに精いっぱい、必死に生きて、大切なことを子供たちにちゃんとバトンタッチした。人間は「誰かのために」と思った時に、希望が生まれてくるし、その希望を持つことによって免疫力が高まり、生きる力が湧いてくるのではないかと思います。

（『致知』２０１２年７月号）

切り取って担任にご提出ください

年　　組　生徒氏名